国　　語

1　学習評価の改善・充実

(1) 学習評価の改善の基本的な考え方

学習評価は、国語科の教育活動に関し、生徒の学習状況を評価するものである。生徒の学習状況を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、生徒が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには、学習評価の在り方が極めて重要である。

各教科等の評価については、「観点別学習状況の評価」と「評定」が学習指導要領に定める目標に準拠した評価として実施するものとされている。観点別学習状況の評価とは、学校における生徒の学習状況を、複数の視点から、それぞれの観点ごとに分析的に捉える評価のことである。生徒が国語科の学習において、どの観点で望ましい学習状況が認められ、どの観点に課題が認められるかを明らかにすることにより、具体的な指導や学習の改善に生かすことを可能とするものである。各学校において、目標に準拠した観点別学習状況の評価を行うに当たっては、学習指導要領に示す目標の実現の状況を判断するよりどころとする評価規準を、観点ごとに定める必要がある。

(2) 評価の観点及びその趣旨

平成30年に改訂された高等学校学習指導要領（以下、「新学習指導要領」という。）では、国語科において育成を目指す資質・能力を「国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力」と規定するとともに、教科の目標を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理している。このことを受けて、国語科における観点別学習状況の評価の観点は、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の３観点に整理された。

次に示す、国語科における「評価の観点及びその趣旨」は、観点別学習状況の評価の対象を観点ごとに表したものである。

【国語科における「評価の観点及びその趣旨」】

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
趣旨	生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使っている。	「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の各領域において、生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりしている。	言葉を通じて積極的に他者と関わったり、思いや考えを深めたりしながら、言葉のもつ価値への認識を深めようとしているとともに、言語感覚を磨き、言葉を効果的に使おうとしている。

(3) 評価規準の設定

ア　国語科における「内容のまとまり」

新学習指導要領では、国語科の「第２款 各科目」の「２　内容」において、「内

容のまとまり」ごとに育成を目指す資質・能力が示されており、「２　内容」の記載はそのまま各単元の学習指導の目標となりうるものである。国語科における各科目の「２　内容」は、〔知識及び技能〕と〔思考力、判断力、表現力等〕の２つの「内容のまとまり」で示されている。

【高等学校国語科における「内容のまとまり」】

<table>
<tr><th>科　　目</th><th>〔知識及び技能〕</th><th>〔思考力、判断力、表現力等〕</th></tr>
<tr><td>現代の国語</td><td rowspan="4">(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項
(2) 情報の扱い方に関する事項
(3) 我が国の言語文化に関する事項</td><td>A　話すこと・聞くこと
B　書くこと
C　読むこと</td></tr>
<tr><td>言語文化
論理国語
文学国語</td><td>A　書くこと
B　読むこと</td></tr>
<tr><td>国語表現</td><td>A　話すこと・聞くこと
B　書くこと</td></tr>
<tr><td>古典探究</td><td>A　読むこと</td></tr>
</table>

イ　評価規準を作成する際のポイント

評価規準は、学習指導要領に示された「内容のまとまり」ごとに作成する。国語科においては、指導事項に示された資質・能力を確実に育成するため、基本的には「内容のまとまりごとの評価規準」が単元の評価規準となる。一年間を通して、当該科目に示された指導事項を身に付けることができるよう指導することが基本である。

(ｱ) 「知識・技能」のポイント

基本的に、当該単元で育成を目指す資質・能力に該当する〔知識及び技能〕の指導事項について、その文末を「～している」として、「知識・技能」の評価規準を作成する。なお、育成したい資質・能力に照らして、指導事項の一部を用いて評価規準を作成することもある。

(ｲ) 「思考・判断・表現」のポイント

基本的に、当該単元で育成を目指す資質・能力に該当する〔思考力、判断力、表現力等〕の指導事項について、その文末を「～している」として、「思考・判断・表現」の評価規準を作成する。なお、育成したい資質・能力に照らして、指導事項の一部を用いて評価規準を作成することもある。

指導事項の一部を用いて評価規準を作成した場合には、指導漏れが生じないよう、年間指導計画において十分に整合を図る必要がある。

評価規準の冒頭には、当該単元で指導する一領域を「(領域名を入れる）において、」と明記する。

(ｳ) 「主体的に学習に取り組む態度」のポイント

①「知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面」と、②「①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面」の双方を適切に評価するため、次の③、④に示すように、特に、粘り強さを発揮してほしい内容と、自らの学習

の調整が必要となる具体的な言語活動を考えて授業を構想し、評価規準を設定することが大切である。このことを踏まえれば、①から④の内容を全て含め、単元の目標や学習内容等に応じて、その組合せを工夫することが考えられる。なお、①から④は固定的な順序を示すものではないこと、④については、言語活動自体を評価するものではないことに留意する必要がある。

①粘り強さ〈積極的に、進んで、粘り強く等〉
②自らの学習の調整〈学習の見通しをもって、学習課題に沿って、今までの学習を生かして等〉
③他の２観点において重点とする内容（特に、粘り強さを発揮してほしい内容）
④当該単元の具体的な言語活動（自らの学習の調整が必要となる具体的な言語活動）

〈　〉内の言葉は、当該内容の学習状況を例示したものであり、これ以外も想定される。

【「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準の例】

④ 作品とその原作との読み比べを通して、① 積極的に、③ 自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつ中で、② 自らの学習を調整しようとしている。

④ を通して、① 、③ （する）中で、② しようとしている。

(4) 観点別学習状況の評価についての実施上の留意点

ア　記録に残す評価の場面について

学習評価については、日々の授業の中で生徒の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要である。したがって観点別学習状況の評価の記録に用いる評価については、毎回の授業ではなく原則として単元ごとに、それぞれの実現状況を把握できる段階で行うなど、その場面を精選することが重要である。

イ　評価結果のフィードバックについて

学習評価を生徒の学習改善につながるものにしていくためには、生徒への学習状況のフィードバックの機能を一層充実させる必要がある。そのためには、評価規準を適切に設定し、評価の規準や方法について、教師と生徒及び保護者で共通理解を図るガイダンス的な機能と、生徒の自己評価と教師の評価を結び付けていくカウンセリング的な機能を充実させていくことが重要である。

ウ　「主体的に学習に取り組む態度」の評価について

現行学習指導要領では、「関心・意欲・態度」の観点における課題として、「学校や教師の状況によっては、挙手の回数や毎時間ノートを取っているかなど、性格や行動の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価であるような誤解が払拭し切れていない」ということが指摘されている。これを受け、従来から重視されてきた各教科等の学習内容に関心をもつことのみならず、よりよく学ぼうとする意欲をもって学習に取り組む態度を評価するという趣旨が改めて強調されたことに留意する必要がある。

エ　評価方法について

高等学校においては、知識量のみを問うペーパーテストの結果や、特定の活動の

結果などのみに偏重した評価が行われているのではないかとの懸念が示されている。観点別学習状況の評価を実施するに当たっては、目標の実現状況を捉えるための適切な方法を用いて評価を行うことが重要である。

国語科においては、「指導と評価の計画」における評価方法の記載について、次のように記載することが考えられる。

観察点検	行動の観察	学習の中で、評価規準が求めている発言や行動などが行われているかどうかを「観察」する。
	記述の点検	学習の中で、評価規準が求めている内容が記述されているかどうかを、机間指導などにより「点検」する。
確認	行動の確認	学習の中での発言や行動などの内容が、評価規準を満たしているかどうかを「確認」する。
	記述の確認	学習の中で記述された内容が、評価規準を満たしているかどうかを、ノートや提出物などにより「確認」する。
分析	行動の分析	「行動の観察」や「行動の確認」を踏まえて「分析」を行うことにより、評価規準に照らして実現状況の高まりを評価する。
	記述の分析	「記述の点検」や「記述の確認」を踏まえて、ノートや提出物などの「分析」を行うことにより、評価規準に照らして実現状況の高まりを評価する。

(5) 観点別学習状況の総括の進め方

ア　観点別学習状況の評価の記録の総括

観点別学習状況の評価に係る記録の総括の時期としては、単元末、学期末、学年末等の節目が考えられる。総括を行う際、観点別学習状況の評価の記録が、観点ごとに複数ある場合は、例えば、次のような総括の方法が考えられる。

(ｱ) 評価結果のＡ、Ｂ、Ｃの数を基に総括する方法

何回か行った評価結果のＡ、Ｂ、Ｃの数が多いものが、その観点の学習状況をよく表現しているとする考え方に立つ総括の方法である。

各学校であらかじめ作成しておいた、右のような換算表に基づいて総括する。同数の場合や３つの記号が混在する場合の総括の仕方をあらかじめ決めておく必要がある。

〈観点別の換算表〉

各評価	総括
ＡＡＡ	Ａ
ＡＡＢ	Ａ
ＡＢＢ	Ｂ
ＢＢＢ	Ｂ

（例）　Ｘさん（Ａ、Ａ、Ｂ）→Ａ
　　Ｙさん（Ａ、Ｂ、Ｂ）→Ｂ

(ｲ) 評価結果のＡ、Ｂ、Ｃを数値に変換して総括する方法

何回か行った評価結果のＡ、Ｂ、Ｃを、例えばＡ＝３、Ｂ＝２、Ｃ＝１のように数値によって表し、合計したり平均したりする総括の方法である。

〈ある観点についての単元末の総括（イメージ)〉

Ａ＝３、Ｂ＝２、Ｃ＝１として表計算ソフトを利用してまとめる。

	単元１		単元２		計	総括
重み付けの比率		1		1.5		
生徒１	2	2	3	4.5	6.5	A
生徒２	3	3	2	3	6	B
生徒３	2	2	2	3	5	B
生徒４	1	1	2	3	4	B
生徒５	2	2	1	1.5	3.5	C
		①		②	①＋②	

☆総括の結果をＢとする範囲　　４≦合計値≦６

イ　観点別学習状況の評価の評定への総括

観点別学習状況の評価の評定への総括は、評価結果のＡ、Ｂ、Ｃの組合せ、又は、Ａ、Ｂ、Ｃを数値で表したものに基づいて総括し、その結果を５段階で表す。

Ａ、Ｂ、Ｃの組合せから評定に総括する場合、「ＢＢＢ」であれば３を基本としつつ、例えば「ＡＡＡ」は５、「ＡＡＢ」は４というように、各観点のＡＢＣの組合せから適切に評定することができるよう各学校において、あらかじめ決めておく必要がある。

Ａ、Ｂ、Ｃを変換した数値を基に評定への総括を行う場合には、例えば、表計算ソフトを用いて、次ページのように総括することができる。併せて、「Ａ　話すこと・聞くこと」、「Ｂ　書くこと」、「Ｃ　読むこと」の領域別にも総括し、学習状況を生徒にフィードバックすることも重要である。

なお、観点別学習状況の評価結果は、「十分満足できる」状況と判断されるものをＡ、「おおむね満足できる」状況と判断されるものをＢ、「努力を要する」状況と判断されるものをＣのように表されるが、そこで表された学習の実現状況には幅があるため、機械的に評定を算出することは適当ではない場合も予想されることに留意する必要がある。

また、評定は、高等学校学習指導要領等に示す各教科・科目の目標に照らして、その実現状況を５段階の数値で表される。しかし、この数値を生徒の学習状況について５つに分類したものとして捉えるのではなく、常にこの結果の背後にある生徒の具体的な学習の実現状況を思い描き、適切に捉えることが大切である。評定への総括に当たっては、このようなことも十分に検討する必要がある。

学年末に、Ａ、Ｂ、Ｃを数値に変換して総括を行う例

次の表について、単元１及び単元５は、「Ａ　話すこと・聞くこと」、単元２及び単元４は、「Ｂ　書くこと」、単元３は「Ｃ　読むこと」の領域について、それぞれ指導した。

〔総括の手順〕

最初に、単元ごとに観点別の評価を行い、評価の結果を数値に置き換えた（Ａ→３、Ｂ→２、Ｃ→１）。次に、その数値の一年間の平均を算出し、観点別学習状況の評価を総括した。最後に、総括した観点別学習状況の評価の結果を数値に換算して（Ａ→３、Ｂ→２、Ｃ→１）その合計を算出し、〈「観点別の評価の換算値の合計」から「評定」への総括の基準〉に基づいて、評定へ総括した。

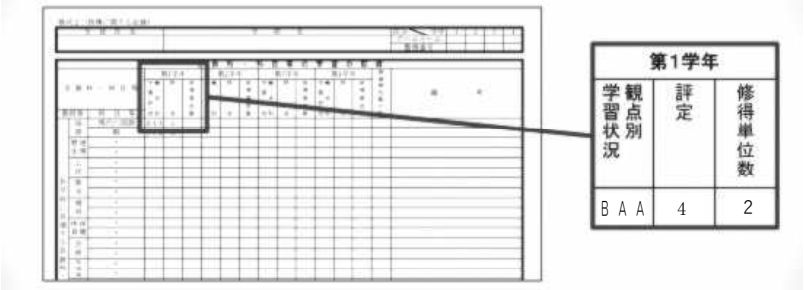
	科目：現代の国語	単元1			単元2			単元3			単元4			単元5			観点別学習状況の評価の総括							
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	知識・技能		思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度		観点別の評価の結果の換算値の合計	評定
	Ａ話すこと・聞くこと		○												○									
	Ｂ書くこと					○						○												
	Ｃ読むこと								○															
	氏名																平均	評価	平均	評価	平均	評価		
1	生徒１	3	2	2	3	3	3	2	2	3	2	3	3	2	3	3	2.4	B	2.6	A	2.8	A	8	4
2	生徒２	2	2	2	1	1	2	2	1	2	1	1	2	2	2	2	1.6	B	1.4	C	2.0	B	5	3

①総括した観点別学習状況の評価の結果を数値に換算（Ａ→３、Ｂ→２、Ｃ→１）、②その合計を算出、③〈「観点別の評価の換算値の合計」から「評定」への総括の基準〉に基づき評定へ総括

〈「観点別の評価の換算値の合計」から「評定」への総括の基準〉

換算値の合計	3	4	5　～　6	7　～　8	9
評定	1	2	3	4	5

【高等学校生徒指導要録様式】



学年末に総括した観点別学習状況の評価は、左のように指導要録の「観点別学習状況」の欄に記載する。

上表の生徒１の例では、「現代の国語」の欄には「観点別学習状況」に「ＢＡＡ」、評定に「４」と記載する。

２　新学習指導要領における指導と評価の計画例

(1) 現代の国語「自己紹介のスピーチをしよう（Ａ　話すこと・聞くこと）」の計画例

ア　単元の目標

(1) 話し言葉と書き言葉の特徴や役割、表現の特色を踏まえ、正確さ、分かりやすさ、適切さ、敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し、使うことができる。　〔知識及び技能〕(1)イ

(2) 目的や場に応じて、実社会の中から適切な話題を決め、様々な観点から情報を収集、整理して、伝え合う内容を検討することができる。

〔思考力、判断力、表現力等〕Ａ　話すこと・聞くこと(1)ア

(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。　〔学びに向かう力、人間性等〕

イ　本単元における言語活動と教材

言語活動：新学期の始まりに自己紹介のスピーチをする。

教　　材：スピーチ動画（よいスピーチ・悪いスピーチ）

〔知識及び技能〕の後の「(1)イ」や〔思考力、判断力、表現力等〕Ａ話すこと・聞くことの後の「(1)ア」等は、学習指導要領「第２款　各科目」の「２　内容」における指導事項の記号を指す。

ウ　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
話し言葉の特徴を踏まえ、分かりやすさ、適切さ、敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解している。((1)イ)	「話すこと・聞くことにおいて、目的や場に応じて、実社会の中から適切な話題を決め、様々な観点から情報を収集、整理して、伝え合う内容を検討している。(Ａ(1)ア)	新しいクラスメイトに自分のことを知ってもらうスピーチをすることを通して、粘り強く、目的や場に応じた情報を収集、整理し、伝え合う内容を検討する取組を行う中で、自らの学習を調整しようとしている。

エ　指導と評価の計画（全５時間）

次	学習活動	指導上の留意点等	評価規準・評価方法等
一（一単位時間）	○　単元の目標や学習の進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 ○　２種類のスピーチ動画を比較し、伝わりやすい話し方についてグループで共有する。 ○　「スピーチ相互評価シート」の評価項目をグループで整理し、評価項目を入力したワークシートを教員のＩＣＴ端末に送信し、提出する。 ○　振り返りシートを記入する。	・教員が用意したよいスピーチと悪いスピーチの動画を視聴させる。 ・動画を視聴させる前に、伝わりやすいスピーチの要素を考えながら視聴するよう指示する。 ・評価項目を記入した「スピーチ相互評価シート」を教員のＩＣＴ端末に送信させる。	〔知識・技能〕 「記述の点検」 ・２種類のスピーチの比較から、伝わりやすいスピーチの要素を抽出し、理解できているかを点検する。 指導に生かす評価
二（一単位時	○　個人で、マッピング（語句を線で結んで、クモの巣状に張り巡らせていくことで、知識や考えを拡充したり整理したりする方法）を用いて、スピーチの材料をできるだけ多くあげる。	・「自分のことを知ってもらう」というテーマでマッピングをし、スピーチの材料をできるだけ多くあげさせる。 ・目的や場に応じたスピーチの構想メモを作成するために、	〔思考･判断･表現〕 「記述の確認」 ・マッピングで可視化した材料を取捨選択して適切な話題を決め、スピーチの構想

間）	○　材料を取捨選択して話題を決め、スピーチの構成や展開を考え、構想メモを作成する。 評価の材料 ○　振り返りシートを記入する。	集めた材料を取捨選択して話題を決めるよう指示する。 ・構想メモを作成するに当たり、スピーチの時間は、一人２分であることを指示する。	メモを作成しているかを確認する。 記録に残す評価①
三（一単位時間）	○　前時に作成した構想メモをもとに、ペアでスピーチを練習する。 ○　お互いのスピーチの様子を録画した動画を見返しながら、よい点と改善点を指摘しあう。 ○　必要に応じて、教師が用意したよいスピーチの動画を見直し、よいスピーチの要素を再認識する。 ○　改善点を踏まえて、スピーチの練習をする。 評価の材料 ○　練習動画を提出する。 ○　振り返りシートを記入する。	・構想メモを見ずにスピーチできるようになるまで練習するよう指示する。 ・聞き手に配慮した表現や言葉遣いに気を付けて練習するよう促する。 ・ＩＣＴ端末を用いてお互いのスピーチを録画するように指示する。 ・授業後に、練習動画を教員のＩＣＴ端末に送信させる。	〔知識・技能〕 「行動の確認」 ・練習動画の生徒の様子から、スピーチにおける、分かりやすさ、適切さ、敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いを理解しているかを確認する。 記録に残す評価②
四（二単位時間）	○　クラス全員の前でスピーチをする。 ○　第１次で作成した「スピーチ相互評価シート」を活用して、自分以外のクラスメイトのスピーチを相互評価する。 ○　全員のスピーチ終了後、伝わりやすいスピーチの要素について、グループで話し合い、「スピーチ相互評価シート」の評価項目を更新する。 評価の材料 ○　振り返りシートを提出する。	・スピーチの前に、第１次で生徒が考えた評価項目を整理した「スピーチ相互評価シート」（教師が作成したもの）を生徒のＩＣＴ端末に送信する。 ・自分以外のクラスメイトのスピーチを聞きながら、「スピーチ相互評価シート」に評価を記入するよう指示する。 ・単元の終了後、「スピーチ相互評価シート」を教員のＩＣＴ端末に送信させる。	〔主体的に学習に取り組む態度〕 「記述の分析」 ・自分のことを知ってもらうスピーチを行う中で、よりよいスピーチになるよう、単元を通して、粘り強く取り組んでいるかを分析する。 記録に残す評価③

オ　評価問題等

【生徒Ａの構想メモ】（第２次で作成）

評価「Ａ」の例

スピーチの構想メモ　　１年〇組〇番　名前 生徒A

１　目的：新しいクラスメイトに自分のことを知ってもらうこと
２　場面：教室の教壇からクラスメイトに向けてスピーチ
３　話題：私の好きなこと
４　内容（話す順番）
①　足が速いことが自慢。（小学校の時に足が速くて得をした思い出を紹介）
②　中学校までは陸上部、高校では山岳部に入り北海道の山を走破したい。
③　得意な教科は国語、詩を書くのが得意。
④　趣味は好きなアーティストの曲に歌詞を付けること。
⑤　人と話すことが好きなので、たくさん友達をつくりたい。

「Ａ」と評価したポイント

生徒Ａは、新しいクラスメイトに自分のことを知ってもらうために、集めたスピーチの材料を取捨選択し、話題を「私の好きなこと」に設定している。構想メモの記述から、話題に即した情報を選定し、聞き手に伝わるように具体的なエピソードを交えて紹介しようとしていることが確認できることから、単元の〔思考・判断・表現〕の評価規準に照らして、「十分満足できる」状況（Ａ）と評価した。

(2) 言語文化「古典作品を原作として、物語を創作する（Ａ　書くこと）」の計画例

ア　単元の目標

(1) 本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解することができる。　〔知識及び技能〕(1)オ

(2) 自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫することができる。

〔思考力、判断力、表現力等〕Ａ　書くこと(1)イ

(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。　〔学びに向かう力、人間性等〕

イ　本単元における言語活動と教材

言語活動：原作をもとに、現代人が共感できる物語を翻案する。

教　　材：「児のそら寝」（『宇治拾遺物語』）

※　前単元とのつながり

前単元「近代以降の文学作品を原作である古典作品と読み比べ、その特徴について考えよう」において、近代以降の文学作品と原作である古典作品との相違点に着目し、取り上げた文学作品に、どのような作者の意図が込められているのかについて考察する学習をしている。本単元は、これを受けて設定している。

ウ　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解している。（(1)オ）	「書くこと」において、自分の思いが効果的に伝わるよう、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫している。（Ａ(1)イ）	原作をもとに物語を創作することを通して、積極的に、自分の思いが効果的に伝わるよう、構成や展開などの表現の仕方を工夫する中で、自らの学習を調整しようとしている。

エ　指導と評価の計画　（全７時間）

次	学習活動	指導上の留意点等	評価規準・評価方法等
一（二単位時間）	○　単元の目標や学習の進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 ○　「児のそら寝」を一斉音読した後、個人で、作品のあらすじを読み取りノートにまとめる。 ○　この作品に表れている書き手のものの見方、感じ方、考え方を踏まえつつ、自分なりに内容を解釈し、グループで交流する。	・前単元の学習を振り返り、我が国の言語文化においては、しばしば翻案が新しい言語文化を担う行為として機能してきたことを確認する。 ・あらすじを捉えられない生徒には、訳文を提示するなど、つまづきに応じた支援を行う。	〔知識・技能〕 「行動の観察」 ・本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解しているかを観察する。 指導に生かす評価
二（一単	○　「児のそら寝」の解釈を踏まえて、翻案作品のテーマを設定し、登場人物や場面、物語の結末をどのようにするのかという設定など	・どのようなテーマを設定すれば、読み手が興味をもつか、検討するよう指示する。 ・読み手に、どのようなことを	〔知識・技能〕 「記述の確認」 ・ワークシートから、翻案作品が原作の趣向を

位 時 間 ）	をワークシート（「児のそら寝アレンジシート」）にまとめる。 ○　ワークシートを提出する。 評価の材料	考えてほしいか、その考えを引き出すためには、どのような構成や展開がふさわしいかなどについて検討するよう指示する。 記録に残す評価①	意識的に踏まえた表現となるように工夫しているかを見取り、本歌取りを理解しているかを確認する。
三 （ 二 単 位 時 間 ）	○　前時に記入したワークシートをもとに、各自のＩＣＴ端末を用いて、800～1,000字で翻案作品を創作する。 評価の材料 ○　完成した作品は、教員のＩＣＴ端末に送信し、提出する。	・ワークシートを返却する際、前次の評価規準に照らして、記述の内容が不十分であれば、再度、全体で確認する。 ・翻案作品の創作活動に入る前に、評価規準を生徒に提示し、意識させる。 ・評価規準は、「①原作の解釈が生かされているか。②読み手に伝わるよう表現の仕方を工夫しているか。③作品として面白いか。」とする。	〔思考・判断・表現〕 「記述の分析」 ・提出された作品から、クラスメイトに自分の表現したいことが効果的に伝わるよう、文章の組立てや述べる順序、言葉の選択など表現の仕方を工夫しているかを分析する。 記録に残す評価②
四 （ 二 単 位 時 間 ）	○　４人１組の班で、互いの作品を読み合い、評価規準をもとに相互評価を行う。 評価の材料 ○　班員の評価を踏まえて改善点を修正し、教員のＩＣＴ端末に送信する。 ○　各班の最も評価が高かった作品を、クラス全員のＩＣＴ端末に一斉送信する。 ○　各自のＩＣＴ端末に送付されてきた作品を各生徒が読み、班での評価と同様に相互評価を行い、クラスの最優秀作品を投票により決定する。 ○　学習の振り返りを行う。	・作品の評価規準に即して、それぞれの項目で５段階評価を行い、総合評価の点数を出すことを伝える。 ・ＩＣＴ端末の投票機能を用いる。 ・創作を通じて、自分が表現しようとしたことが上手く表現できたか、創作を行う上で難しかったことは何かについて振り返らせる。	〔主体的に学習に取り組む態度〕 「記述の確認」 ・書き直した翻案作品から、よりよい作品にするために、積極的に取り組んでいるかを確認する。 記録に残す評価③

オ　評価問題等

【生徒Ｂのワークシート】（第３次で作成）

評価「Ｂ」の例

「児のそら寝」アレンジシート　　１年〇組〇番　名前 生徒B

１　テーマ：できなかった告白、伝わっていた気持ち
①登場人物：私（野球部マネージャー、高１女子）、憧れの先輩（野球部主将、高３男子）
②場面：夏の高野連地区大会決勝で敗退、先輩は今日で引退。帰路に着く２人。
③結末：告白できない私。別れ際、先輩が「気持ち伝わってたよ。俺も同じ気持ちだよ。明日からも一緒に帰ろう。」と言う。隠れていたチームメイトが、出てきて祝福。嬉し、恥ずかし、涙。

ワークシートの記述から、生徒Ｂは、「児のそら寝」の自分なりの解釈を生かして、原作の趣向を意識的に踏まえた表現となるよう工夫していることが分かる。このことから、本歌取りを理解していると判断し、単元の〔知識・技能〕の評価規準に照らして、「おおむね満足できる」状況（Ｂ）と評価した。